

グローバルビジョンを掲げ 医療界をリードする3病院

前号では、グローバルニッチ分野に専門特化している2病院を取り上げた。今回は最先端の高度医療から、救急医療までフルラインナップされている韓国国内でも中核となる3病院の現状を報告する。

ヨンセイ大学の附属病院であるセブランス病院、現代グループの財団が運営するアサンメディカルセンター、カトリック大学の附属病院であるセントマリー病院の3病院。いずれもグローバルビジョンを掲げ、No.1 病院をめざしている。

株式会社 MM オフィス
チーフコンサルタント 藤井 将志

れまでの手術件数は2,400件以上である。最新の医療機器が導入されているだけでなく、その使用頻度も高稼働になっている。

施設間連携を支える IT システム

スマートカードを利用して 連携病院との情報共有を実現

セブランス病院は同一敷地内にメインの病院施設だけでなく、医学部、歯学部、看護学部の教育施設や研究施設(メディカルリサーチセンター)を持つ。加えて、眼科病院、がんセンター、リハビリ病院、心臓血管センター、子供病院が別施設として存在。グループ内の病院としては、セブランス病院を含む3つの総合病院、歯科病院1つ、精神病院1つの5病院がソウルと京畿道にある。

これらの施設をつないでいるのが IT システムだ。メインホスピタルとなるセブランス病院では1981年の電算システムを皮切りに、1997年からはオーダーリングシステム、2001年からは PACS を導入。その後、2005年の新病院開院に伴い、これらのシステムを統合した電子カルテシステム (EMR) を採用して

セブランス病院の特徴

2,000 床超の巨大病院 最新医療機器が高率で稼働

韓国で最初のメディカルスクールが開かれたのは、1899年(政府の公式認定は1909年)。ヨンセイ大学のメインホスピタルであるセブランス病院は、1900年にアメリカ人であるセブランス氏が寄付した財団により設立された。



セブランス病院のエントランス

2,076床を抱える巨大病院で、職員は6,000人弱。1日の平均初診患者数は1,235人、再診患者数は5,297人、1日の入退院患者は210人。在院患者数1,800人、平均在院日数7日と非常に大規模な病院である。2005年に120周年記念で開院した新病院は、地下3階から21階まで延床面積で5,200坪もあり、手術室は38室ある。

医療機器はPET-CTが1台、CTが7台(うち1台は64列)、MRIが6台、日本にもまだ数台しかない(2008年3月末5台)手術ロボット『Da Vinci』も2005年にアジアで初めて導入された。ちなみに、これらの機器の稼働状況は、CR・MRIは1日150人程度の患者数であり、『Da Vinci』のこ



セブランス病院のスマートカード用院内端末



セブランス病院の JCI 認定記念碑

JCI 取得の背景には 2 つの狙いがあった。

いる。

EMR では、スマートカード（非接触型メモリカード）を通した連携病院との情報共有や原価計算、大学病院としては教授別の評価（教育面、研究実績面、診療面）などが可能。また、患者用のスマートカードを利用して、病院駐車場への入出管理から、院内端末の予約・案内、支払いなどができるようになっている。グループ病院間の連携としては、50 人の放射線科医（他に研修医 25 人）がいる本院の放射線部門で、全国 5 施設の読影を行っている。

韓国初の JCI 取得病院

医療技術やサービス水準の向上が外国からの集患につながる

セブランス病院は 2007 年 5 月に韓国で初めて JCI（Joint Commission International）を取得している。病床数が 2,000 床以上ある病院で JCI を取得しているのは、世界でも同院だけである（2009 年現在）。120 年もの歴史があり、韓国国内では確固たる地位を確立している同院だが、

1 つは、国内の評判は高かったが、その評価が科学的に証明され世界から十分に評価されたものではなかったこと。もう 1 つは、今後長期的に国内だけでなく、海外からの財政支援も視野に入れている、ということだ。実際に JCI 取得の結果、同院では、①安全性やサービスの水準が向上し、治療プロセスにおいてもガイドラインの適応が増えた、②職員の意識面において、グローバルスタンダードレベルという自覚が醸成された、③韓国国内に対しても、韓国の医療界を先導していく病院であるというイメージが確立した、という。

JCI に関しては、日本でも 2009 年に亀田総合病院（千葉県鴨川市）が国内で初めて取得したことから注目度が上昇している。「外国人患者の受け入れを増やすため」、「医療・ツーリズムの促進のため」に JCI の取得をめざすという話もあるが、JCI の取得そ

のものが外国人患者を集める直接的な要因とはなりにくい。取得の結果、医療内容が透明化され技術水準が向上したり、サービスレベルが上がることで外国からの集患につながるのであろう。費用も労力も非常にかかる

JCI 取得には、より先を見た取得目的が必要となる。

アサンメディカルセンターの特徴

**多くの分野で最多症例数を診療
心疾患、臓器移植に注力**

2 つめの病院は、現代グループの創設者 Chung Ju-Yung 氏が設立したアサン財団が運営するアサンメディカルセンターである。病床数は韓国最大の 2,680 床を持ち、外来患者数は 1 日 9,000 人（目標は 1 万人）、在院患者数は 2,121 人、年間の手術件数は 5 万件以上である。

韓国で症例数の多い上位 30 疾病中、15 疾病においてアサンメディカルセンターが最大の症例数を誇っている。がん分野においては上位



アサンメディカルセンターの外観



10のがんのうち、9つのがん種はトップの症例数で、まさに韓国医療の中核を担う総合病院である。

そのなかでも、とくに技術力が高いのが心疾患と臓器移植の分野である。狭心症へのステント留置術は年間約1,500人、臓器移植症例数は726症例（2007年）、そのうち脳死症例は82症例（他病院からの移転患者含む）で心臓移植は25症例にも達する。これらの分野では海外からの研修希望者が常に待機しているほど、技術面でも注目されている。

世界での人材育成を意識

ハーバード大学との人材交流で短期間で急成長

このように韓国有数の実績を誇る同院だが、開院は1989年とまだ20年ほどの歴史しかない。この間に米国ハーバード大学と公式協定を結び、積極的に世界の舞台で人材育成をしてきた。当初は同院からの医師の研修派遣がほとんどであったが、現在ではハーバード大学とのエクスチェンジ医師数が同数に近くなってきている。このことから、医療レ



アサンメディカルセンターの屋上庭園



セントマリー病院の外観

ベルが短期間に向上したことがうかがえる。

医療設備面でも、CT12台、MRI 8台、PET 4台をはじめ、ガンマナイフ、『Da Vinci』と非常に先進的な設備が備わっている。『Da Vinci』では、韓国で初めて100症例の心臓手術を達成し（2009年1月）、毎週平均2症例の心臓手術を行っている。ITシステムもオーダーリングシステム、PACS、電子カルテが導入されている。

オーダーリングシステムは、治療者や患者の状況に合わせてオーダー内容が変化する仕組みで医師の業務支援に役立っている。非営利の財団が運営しているため、利益の追求は求められていないが、経済的に持続可能な組織であることは重要といえる。システム上にも医師のオーダー画面にコストが表示されるなど、経営を考えさせる仕組みが整っている。

セントマリー病院の特徴

アジア最大の BMT 拠点 生存率でも高成績を維持

3つめの病院はカトリック大学附

セントマリー病院・BMTセンター



属のセントマリー病院である。2009年に開院した新病院は、地上22階、地下6階で1,200床の規模を有する。先述の2病院に比べれば規模は小さいが、日本の病院としてみれば有数な大きさであることは間違いない。

母体となるカトリック中央医療院グループは、1936年のカトリック聖母病院が先駆けとなり、1954年には医科大学を開校。その後、規模を拡大し、現在は韓国国内に8つの病院、16の姉妹病院を持つなど、歴史も規模も有数の病院グループといえる。新病院の医療設備は、CT、MRI、PETはもちろん、サイバーナイフ、トモセラピー、『Da Vinci』も備わっており、まさに高度医療を提供するのに十分な機能だ。

同院最大の特徴は1979年から運用されているBMT（骨髄移植：Bone Marrow Transplantation）センターである。2009年6月には3,500症例目の治療が行われた。NMDP（アメリカのNational Marrow Donor Program）の2002～2006年のデータと比較すると、MDアンダーソンがんセンターの4,122症例を筆頭とする上位4

病院に次ぐ件数を同院が診ていることになる。件数の多さだけでなく、生存率も 85～90%と高い成績を維持している。その他、角膜移植手術においても韓国国内最大の症例数を誇るなど、多くの診療分野で成績を残している。

メディカル・ツーリズムへの対応

外国人患者は1%以下もサービス対応部署を完備

では、これらの病院でどれだけ外国人患者が集められているのであろうか。3病院すべてで一般的な治療を目的に来院する外国人患者は少数であり、全体の1%以下だという。3病院とも韓国国内の医療を提供することがメインとなっていることは間違いない。このため、治療目的の外国人患者が病院全体に与えるインパクトは大きくはない。

ただし、どの病院にも外国人の対応を行う部署があり、英語や中国語（病院によってはロシア語）の対応が可能であった。セントマリー病院では外国からの病院視察だけでも年間100件を超えるという。患者サービス面での外国人対応だけでなく、グローバルな視野を掲げた組織として、外国人への対応が可能となっている。

また、3病院とも健診センターについては外国人の集患に積極的である。アサンメディカルセンターでは毎月60人もの外国人患者が健診を受けにくる。翌日の検査結果説明や、検診用のVIPルーム、患者1人に対して1人の看護師など手厚いサー



アサンメディカルセンターの健診用VIP室

ビスを提供している。

同様のVIPナースが患者につくサービスはセントマリー病院でも提供されている。もちろん、これらのサービスは外国人だけでなく国内患者も対象となる。一般の患者とは別スペースで提供されており、最新の病院施設のなかでも健診スペースの豪華さは際立っている。

3病院が掲げるミッション

グローバルなビジョンが病院の将来を決定する

韓国の病院をみて最も驚いたのが、各病院が掲げているミッションである。3病院のなかで最も歴史のあるセブランス病院は「世界中の総合病院（general hospital）のモデルとなること」を掲げている。アサンメディカルセンターではハーバード大学を始めとする世界的な医療機関との交流などを通し、「グローバルな医療複合体（Global Medical Complex）」をめざしている。セントマリー病院では「ワールドクラスな医療サービス」をコミットメントに掲げている。先月レポートした2病院も含め、今回視察したすべての

セントマリー病院の健診センター



病院が韓国国内の医療の発展を念頭に置きながらも、グローバルもしくはアジアにおいて自院の強みで「ナンバーワン」になることを目標にしている。

翻って日本の医療機関で「グローバルなビジョン」を打ち出しているところはどのくらいあるだろうか。すべての病院がそうである必要はないが、日本でも最先端をめざす病院は世界レベルの目標を掲げてもいいだろう。たとえ韓国の医療水準が現段階で日本と同格、もしくは低いとしても、将来の目標が圧倒的に高ければ逆転されるのは時間の問題である。世界トップレベルをめざさずトップになれた組織はおよそないであろう。

藤井将志（ふじい まさし）

2006年早稲田大学政経学部卒業。同年、大手医療経営コンサルティング会社に入社、大学病院と公的病院のコンサルティングを主に行う。現在、株式会社MMオフィスのチーフ・コンサルタントとして病院経営支援活動を中心に活動。専門は病院経営改善の実行支援。医療コミュニケーション研究所主宰、NPO法人病院経営支援機構でもコンサルタントとして活躍中。